

平成29年度 帰国・外国人児童生徒等教育の推進支援事業
(Ⅱ 定住外国人の子供の就学促進事業)

事業内容報告書の概要

都道府県・市区町村・協議会名【 和歌山市 】
平成29年度に実施した取組の内容及び成果と課題
1. 事業の実施体制 日本語指導員9人を小中学校に派遣する。対応言語は、英語、タイ語、中国語等で指導員は教員免許状や日本語教師免許状等の所有者。
2. 具体の取組内容 ・外国籍等で日本語理解が難しい児童生徒に対して、和歌山市の小中学校に日本語指導員を派遣し、児童生徒に対して日本語指導を実施。 ・派遣先は、和歌山市立宮前小学校、和歌山市立大新小学校、和歌山市立河北中学校、和歌山市立有功中学校、和歌山市立紀之川中学校、和歌山市立城東中学校、伏虎義務教育学校の7校で在籍する11人の児童生徒に対して9人の指導員が支援を行った。 ・勤務形態は、週2回1時間ずつ、または週1回2時間ずつ、教室での支援や別室で取り出し指導などを行った。 ・指導内容は、小学校では、国語の教科書をはじめ、子供の興味や関心のある教材(カードやプリント、図鑑等)、日常生活に必要な感情を表す絵カード、指導員が作成した手作り教材などを利用し、個々の能力に応じた指導を行った。 ・中学校では、日常会話を中心に、円滑なコミュニケーションができるよう指導したり、社会科用語や授業での教師の指示を分かりやすく解説したりするなどの支援をした。
3. 成果と課題 成果 ・最初は意思疎通等難しいこともあったが、指導員が児童生徒の興味に沿って、いろいろな指導の工夫をしたことで、子供は安心した環境で興味関心を持続して学習できた。また、表情も日に日に明るくなっていった。 ・指導員が子供との信頼関係を築くために、学習以外で不安な気持ちを聞いたり、相談にのったりしたことで、より子供が安心し、落ち着いて学習できることにつながった。 ・子供の笑顔が多くなり、他の児童生徒とのコミュニケーションも徐々にとれるようになってきた。 課題 ・年度当初は家庭への連絡事項が多く、内容的にも複雑なので、緊急時の連絡は家庭へ正確に伝えられるような支援が必要であること。 ・日常会話としての日本語の理解は比較的身につけやすいが、学習言語としての日本語を理解するのは難しく、時間を要すること。 ・学校で日本語の習得はできても、家庭での会話が母語中心になるため、家庭での日本語習得が難しいこと。 ・遊びの中で日本語を獲得していくような工夫が必要とされること。 ・漢字の習得は難しく、ひらがなばかりの表記になってしまうことが多いこと。また、数学は文章問題が簡単なものでも自力で取り組むのが難しいこと。 ・中学生の場合は日本語支援だけでなく、高校受験に向けての支援も必要とされるため、内容的に高度な支援が必要であること。 ・タガログ語など稀少言語に対応できる指導員の確保が難しいこと。

4. その他(今後の取組等)

- ・さらに多くの言語に対応できる指導員を確保するために、国際交流センターや和歌山大学と連携し、留学生や在留外国人とネットワークを持つようにする。
- ・今後はタブレットやパソコンを利用して、興味関心を持って楽しく学べる教材を選ぶことで、効果的な支援に繋げる。

※ 枠は適宜広げること。(複数ページになっても差し支えない。)